

## 鯨 研 通 信



第403号

1999年9月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)

## ◇ 目次 ◇

南氷洋における鯨の保護区 .....	田中昌一	1
鯨調査船“勇新丸”の処女航海を終えて .....	鈴木重男	5
日本鯨類研究所関連トピックス (1999年6月～8月) .....		14
日本鯨類研究所関連出版物等 (1999年6月～8月) .....		15
京きな魚 (編集後記) .....		18
スタンディングレコード (1999年2月～5月受付) .....		19

## 南氷洋における鯨の保護区

田中昌一 (日本鯨類研究所)

1. IWCと保護区  
(サンクチュアリー)

捕鯨取締条約第5条で、国際捕鯨委員会 (IWC) は禁漁期、禁漁区、保護区 (サンクチュアリー) を設けることができるとされているが、ここで条約が禁漁区と保護区をどのように区別しているのかは明らかでない。一般的にいて、禁漁区は資源や漁業の管理や調整の目的で、漁業に関する特定の行為を禁止する区域をいい、一方保護区はより自然保護的色彩が濃く、より広い範囲の地域や対象などに適用される。IWCはいろいろな捕鯨禁止海域を定めているが、サンクチュアリーと呼ばれたのは南氷洋VI区とI区の一部 (70°W～160°W) が1938-1954年の間保護されていたのが最初の例のようである。このサンクチュアリーはかなり便宜的に設けられたものである。

IWCでサンクチュアリーがホットな課題になったのは、1979年にセイシエルがインド洋サン

クチュアリーを提案して以来である。提案者は鯨類の繁殖場を保護する効果があり、また長期間全ての鯨種が保護されるので生態系研究のよい機会を与える等の主張をした。しかし商業捕鯨の禁止で科学的情報が得られなくなる等の反対があり、IWC科学小委員会 (IWC/SC) では結論が得られなかった。委員会ではこれが投票によって可決され、付表に新しいパラグラフが挿入された。期限は10年で、5年後にレビューすることとなった。インド洋サンクチュアリーが科学研究を促進するという主張を裏付けるため、インド洋研究計画立案がSCに付託された。しかし目立った研究としては、ザトウクジラやセミクジラのような沿岸性の鯨種についての目視調査が続けられたこと、外洋域に関しては日本が南氷洋への往復路で目視調査を行なったほか、見るべきものはなかった。インド洋サンクチュアリーに対する締約国の関心は薄く、科学会合やレビュー会合は後回しとされ、具体的なIWCの活動は進展せず、SCでは否定的意見も

多く出された。しかし1989年に期間の3年延長が決められた。

## 2. 南大洋のサンクチュアリー

1990年当時、SCは包括的評価(CA)に力を注ぎ、改訂管理方式(RMP)の開発を進めていたが、1992年にこれが完成し、IWCに提出された。RMPの優れていることを承知していた反捕鯨国は、商業捕鯨の再開を恐れ、新しい捕鯨阻止の手段としてその年にサンクチュアリー拡大を計った。セイシエルはインド洋サンクチュアリーの無期限延長を提案、またフランスが南緯40度以南の南大洋のサンクチュアリーを提案した。インド洋の方は2002年まで10年間延長されたが、フランス提案は南極海洋生物資源保存委員会(CCAMLR)等の関連機関とも連絡を取りながらさらに審議を続けることとなった。

フランス提案は、サンクチュアリーはRMPを補強するものとし、RMPだけでなく、種々の方法を組み合わせて管理するべきであるとしている。南大洋のサンクチュアリーはインド洋と合わせて全ての大型鯨種のそれぞれ一つ以上のストックを繁殖場、摂餌場の全域で保護することができ、これを長期的に継続することによって、破壊された生態系を回復させることができると主張する。さらに鯨生態の研究を促進することが期待でき、また南極条約の環境保護の趣旨にも副うものであるとしている。区域は南緯40度以南の南大洋全域である。このサンクチュアリーの本来の保護対象はインド洋系の鯨類であるが、鯨が南氷洋で大きな東西移動をすることが示されているので、全南大洋を含むものとする。さらに研究について、SCが関連機関と協力して研究計画を立てることとなっている。

1993年の京都會議で再度フランス提案が審議された。SCでは、管理方式としてサンクチュアリーを提案するならば十分なシミュレーション・トライアルを行なうべきだとの議論もあり、また50年禁漁とRMPを組み合わせたトライアルの結果では効果はほとんど認められないことが報告された。このためSCでは結論が出せなかった。IWC本会議では南大洋の保護区に支持を表明しながらも、なお多方面から検討し、

中間会議を開いたあとで来年決着させるという決議が採択された。中間会議は1994年にNorfolk島で開かれ、その後メキシコでの年次会議で、付表修正が可決され、南大洋のサンクチュアリーが決まった。日本はミンククジラに対して異議申し立てを行なった。

SCは1995年以来サンクチュアリーの合意された目的は何かと委員会に質問を繰り返していたが、その回答が1998年年次会議で初めて示された。多数決で採択された決議によると、その目的は①鯨資源の回復と資源の研究とモニタリングの促進、②モラトリアムの効果をモニターするCAの継続、③環境変動の影響の研究、とされている。サンクチュアリーの意義は不明確のままである。日本は1995年以来引き続きサンクチュアリーの違法性の理論を展開してきたが、多くの賛同を得るには至っていない。

## 3. 鯨資源管理とサンクチュアリー

### 3.1 RMPは信頼できないか？

RMPほど電算機シミュレーションで徹底的にテストされた資源管理方式はない。近年工学方面では電算機シミュレーションは一般に用いられており、最近問題になったように、核兵器の開発まで電算機シミュレーションによって行なわれている。確かに電算機実験によって開発された管理方式を現場に応用した経験がないので、十分なノウハウが蓄積されているわけではない。その意味でRMPを実際に適用したときに何の問題も生じないと期待するのは楽観的過ぎる。しかし、鯨の管理は短期間で成功、失敗の結果が決まってしまう、やりなおしができないというものではない。幸いにも、現場での試行を続けながら、状況のみて臨機の対応を取る時間的余裕がある。RMPを適用する場合、モニタリングと調査の体制を整えておくことが必要条件であるが、これらを通じて管理の効果を見ながら方策を適宜修正し、失敗を未然に防止できる。その意味では、ジェット旅客機より安全であると言えよう。だから、RMPは信頼できないからサンクチュアリーを併用するという事は当たらない。

### 3.2 いろいろな管理方式の組合せが必要か？

答えは当然イエスである。小型魚の保護をする場合、網の目合の規制だけでなく、漁期や漁場の制限、さらに小型魚の所持、販売の禁止などが合わせて行なわれる。これらはお互いに補い合って、効果をより確実なものとする。それではその漁業を全面的に禁止するという方策を組み合わせたらどうなるか。他の規制は全て無意味なものとなり、全面禁漁という唯一の規制だけが効果を有することになる。これは組合せの原則に反している。サンクチュアリーも同じことである。

工学関係で重要な概念としてフェール・セーフという考え方がある。設備の一部で故障などの不都合が生じたとき、これをバックアップする装置が備えられていれば、事故がそれ以上拡大することを防げる。RMPはその中にフェール・セーフの考え方をすでに一部取り入れているが、さらに実施に当たってもこの概念を取り込むことが望ましい。残念ながら我々はRMPを実行に移した経験がないので、どのようなフェール・セーフの方式を取るべきかは今のところ明確でない。しかし先に述べたように、モニタリングによって失敗を未然に防ぐことができるのだから、RMPの実行を妨げるほどの重大性はない。

RMPを実行する場合、他の一切の規制が不要になるわけではない。鯨の生態、資源状態等に応じ、繁殖場での禁漁、子連れ鯨の保護などの規制は当然続けられることになるだろう。

### 3.3 サンクチュアリーは持続的利用の原則になじむか？

1992年リオデジャネイロでの国連環境開発会議(UNCED)は21世紀の人類の行動計画として「アジェンダ21」を採択したが、その中で水産資源の持続可能な利用の原則を立てた。1995年国際連合食糧農業機関(FAO)の支援を受けて日本が京都で開催した「食料安全保障のための漁業の持続的貢献に関する国際会議」も持続可能な利用を支持した。

ところでフランス提案の南大洋サンクチュアリーの目的は、破壊された南氷洋生態系を回復

させることだとされているが、原始の状態まで回復させるのか、生産性が最高になるレベルを目指すのか、回復したあとどうするのかは明確でない。持続的利用を望むならば、資源はその生産力が最大になるような状態に維持するのが理想である。現在枯渇している資源をこの状態に回復させるのに、全面禁漁にすべきか、あるいは控えめな捕獲を続けながら回復させるかは、与えられた条件によるので一概には言えない。全面禁漁にすれば資源の回復は早いが、経済的、社会的負担が大きい。一方捕獲を続ければ、負担は少ないが、回復が遅れ、より大きな将来の利益が一部得られなくなる。一般的には、社会が耐え得る限度で負担を負いながら、できるだけ早く回復させるという方策が最善である。いろいろな漁業で、資源回復の最適戦略の分析のなされた例がある。

南大洋のサンクチュアリー提案に当たって、このような分析は一切行なわれていない。禁漁の効果は当然それぞれの資源の状態によって異なる。ミンクジラのように、現在でも利用が可能な資源を禁漁にすることは、期待される利益を放棄することになる。生態系全体の回復を計るためというのであれば、ミンクジラの保護が悪影響を及ぼすという理論に対して、証拠がないと否定するだけでなく、保護が必要だという理論的根拠を示すべきであろう。

これらのことを考えると、南大洋サンクチュアリーの本来的な目的は捕鯨を禁止することに尽きるように思われる。少なくとも、生態系の回復が実現したときにどうするのかという展望なしには、サンクチュアリーが持続的利用の原則になじむとは言えない。

### 3.4 鯨の保護が生態系の保護につながるか？

著しく枯渇した多くの大型鯨類資源をより高いレベルにまで回復させることが、生態系の面から言って望ましいことは疑いない。IWCはすでに長期にわたってこれら鯨類資源を完全に禁漁にして保護している。しかし完全な保護が無条件に正しいわけではない。SCはサンクチュアリーによって鯨資源の組成が未利用状態の組成に回復する可能性は低いと見ている(Rep. int

Whal. Commn 44 : p.99 を参照)。多くの生物集団は、人間の間引きがなかったときに原始の状態で安定していたわけではなく、絶えず変動を繰り返していたはずである。だから捕獲を停止したとき、鯨資源がもとの状態にもどるという保証はない。

小笠原島では山羊が増えすぎて植物を食べ荒らし、貴重な自然環境が破壊されつつある。また日光で鹿が増えて、ある種の植物の絶滅が心配され、鹿の間引きも考えられているという。アフリカの草原で豊富な動物相が維持されているのは、草食動物と肉食動物が共存しているからである。南大洋の鯨以外の漁業資源の管理を行なっているCCAMLRは、生態系の関連を考慮しながら、高い生産性を維持できる水準に漁業資源を保存、管理することを目指している。一方これらの資源の捕食者である鯨類は全面的に禁漁になる。草刈りを続けながら山羊の増加を放置すればどうなるか。植物相が破壊されて草刈りはできなくなり、山羊は飢え死にしまう。

人間が殺しさえしなければ動物達は幸せに長生きできると考えるのは、人間の思い上がりである。人間が生活のために生態系の中から動物や植物を食料として間引かなければならないとすれば、生態系内のバランスを崩さないように、広い食性段階に対して満遍無く捕獲圧を加えるべきである。鯨の餌の生物量を2/3に減らしたならば、鯨の生物量も2/3にしなければバランスが取れない。この時の間引き率は、もちろん鯨の方が餌生物のそれよりはるかに低いであろう。1996年の京都会議は生態系を考慮した複数種の管理の必要性を強調している。

### 3.5 サンクチュアリーの効果はどうやって見積もるか？

数々の疑問を残したまま、IWCは南大洋サンクチュアリーを設置した。このような状態において、少なくともサンクチュアリーが鯨の資源にどのような変化をもたらしたかをモニターすることは、IWCの最低の責任である。サンクチュアリー設定の目的のなかにも、科学研究の推進が大きくうたわれている。サンクチュアリーの効果を見積る場合、問題は、すでにモラトリ

ウムによって全面的に禁漁になっていたので、サンクチュアリーによって加えられた規制は実際上にもなかったということである。サンクチュアリーの導入によって特に科学研究が促進されたわけでもない。日本の南氷洋での調査は、モラトリウムの結果として始まったものである。我々の知り得るのは結局モラトリウムの効果である。

モラトリウムの効果を見積もるためには、最低限鯨資源がどのように増加しているかをモニターしなければならない。南大洋全体について行なわれているこれに関連する研究は、国際鯨類資源調査10ヶ年計画(IDCR)とこれを引き継いだ南大洋鯨類生態調査(SOWER)だけである。この調査はほとんど3回にわたって南氷洋全域の目視調査を行なったが、これだけの調査では残念ながらまだ資源量が増加したことを統計的に証明することはできない。南極海ミンククジラ捕獲調査(JARPA)は1987年以来隔年にIV区とV区の調査を続けているが、ザトウクジラなどが最近急速に増えてきたことを示唆する情報はあるものの、資源の増加率の推定などはできていない。この調査が今後10年、20年と続けられるならば、食性、成長、成熟、妊娠などの変化の傾向が示されるかもしれない。

JARPAはもちろん日本の国家予算で進められているが、IWCの事業であるSOWERの経費も大部分日本が負担している。日本は将来捕鯨を再開するために積極的にこれらの調査を支援しているのであるが、もし捕鯨の再開を放棄した時になおこのような多額の経費を負担するとは考えられない。日本は南極観測のために鯨調査以上の経費を支出しているが、これは南極研究への要請が国の内外で非常に強く、国民的合意が得られているからである。残念ながら、鯨の研究について、このような条件はない。

## 4. インド洋サンクチュアリーの教訓

インド洋サンクチュアリーはセイシエルによって提案され、オーストラリアが全面的にこれをバックアップして実現し、維持されてきた。そして、科学研究の推進が標榜されていた。

IWCでも科学研究計画をSCに検討させるなどしたが、早急に開くことが予定されていた科学会合が開かれたのは、設定から7年余たった1987年2月であった。行政面を検討する会合が2回開かれたが、出席したのは数カ国に過ぎなかった。設定後5年後に行なうはずであったサンクチュアリーのリビュー会合も、開かれたのはサンクチュアリー期限ぎりぎりの1989年であった。このようにサンクチュアリーが設けられ、また捕鯨のモラトリアムが決められたため、各国のインド洋の鯨資源に対する関心は低下し、科学研究はほとんど行なわれず、IWCのなかでインド洋サンクチュアリー関係の予算要求に対して低い優先順しか与えられなかった。そのため、サンクチュアリーの生産的な効果は認めら

れず、資源に対する影響もまったく不明のままである。

大学などで基礎研究が進められているのは、科学者の純粋な好奇心のためといわれるが、そのために支出されている予算額はそれほど大きくない。核物理とか南極観測などの基礎研究に多額の予算が支出されるのは、将来の応用への期待と、国威発用のためである。南氷洋の鯨研究が基礎科学としてそれだけの条件を備えていないとすれば、やはり応用研究としての意味を考えなければならない。高いレベルの資源研究を維持するためには、持続的利用の裏打ちが必要である。我々はインド洋サンクチュアリーのもたらした結果に学ぶべきである。

## 鯨調査船“勇新丸”の処女航海を終えて

鈴木重男 (元 共同船舶(株)船長)

### 1. はじめに

1999年4月26日、勇新丸は初めての南氷洋鯨類捕獲調査航海を無事に終え、半年振りに生誕地である広島県因島市の内海造船(株)田熊工場の岸壁に帰ってきた。私は1997年5月から、この勇新丸の艦装要員として船体の設計から建造まで携わり、竣工後は船長として本船に乗船して南氷洋航海を共にしていた。

捕鯨船の建造は、沿岸小型捕鯨船を除き1972年の昭南丸、第2昭南丸を最後に途絶えたままになっていた。1970年代に入ると捕鯨を巡る国際規制が急速に厳しくなり、我が国の捕鯨産業は縮小に次ぐ縮小を余儀なくされ、我々捕鯨船員の職場では合理化が繰り返されていた。今回の捕鯨船の建造も第18利丸(1958年建造)が1995年に南氷洋に向かう途中で浸水事故にあったことが発端で、安全対策上の必要性から浮上した話である。しかしながら、捕鯨人生の大半を規模縮小に伴う合理化の中で過ごしてきた私達にとって、新しい船を造るということは、将来に向けての投資の開始、即ち職場の未来が安

定してきた証明と写るのである。新造捕鯨船、私達にとってその言葉は、将来に繋がる夢の掛け橋と同義語であったのである。1997年4月、第1京丸の船長として南氷洋から下関港に戻った私が、出迎いの共同船舶(株)幹部から、新造船建造の艦装を担当せよとの内示を受けた時に、どれほど身が引き締まる思いをしたか察して頂けると思う。以下は26年振りの出来事となった新造捕鯨船の誕生から処女航海終了までの記録である。

### 2. 艦装

1997年5月7日に共同船舶(株)内に組織され、その後強化された艦装チームのメンバーは表1の通りである。私が最年長者であったが、なにせ26年振りの事業ということで、艦装チームはもちろんのこと、建造を請け負った内海造船(株)内にも捕鯨船を造った経験者は皆無であった。暫くは必要に応じて会社に出社する状態が続いたが、艦装に係わる文章は勿論のこと、図面を開いて検討することに慣れるまでに相当の時間

表 1. 勇新丸機装員一覽

時期	平成9年5月	平成9年11月	平成9年12月	平成10年1月	平成10年4月	平成10年7月	平成10年8月	平成10年9月	平成10年10月
船長	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男	鈴木 重男
砲手						竹下 湖二	竹下 湖二	竹下 湖二	竹下 湖二
1等航海士		南 淨邦	南 淨邦		三浦 敏行	三浦 敏行	三浦 敏行	三浦 敏行	三浦 敏行
2等航海士	小川 知之				野島 茂	大越 親正	大越 親正	榎 公二	榎 公二
見習航海士								大島 卓朗	大島 卓朗
機関長	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英	生出 明英
1等機関士	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏	齋藤 秀敏
2等機関士				榑崎 郁夫	榑崎 郁夫	榑崎 郁夫	榑崎 郁夫	榑崎 郁夫	榑崎 郁夫
3等機関士					大本純一郎		宮本 成基	宮本 成基	宮本 成基
通信長			相澤 敏男			松川 義男	松川 義男	松川 義男	松川 義男
2等通信士								桑岡 潤	桑岡 潤
甲板長						遠藤 健一	遠藤 健一	遠藤 健一	遠藤 健一
甲板手							平井 智哉	平井 智哉	阿部 卓一
甲板員								中村 教彦	中村 教彦
"								歌代 準也	歌代 準也
"								澤部 貴人	澤部 貴人
司厨長		奥村 秀男	奥村 秀男				奥村 秀男	奥村 秀男	奥村 秀男
計	4	5	6	4	7	9	12	17	17

を要した。それでも造船所の技術者達と何度も議論を繰り返すうちに、船型の開発に当たっての方向が固まってきた。その概略は次の通りである。先ず、日本から遠く、且つ時化の多い南水洋での操業を前提に、耐航性能とクジラを追尾するための凌波性と操縦性を重視することから、基本的には傾斜船首、巡洋艦船尾型で大きな上甲板船首シャー及びイニシャルトリムをつけ、船首／船尾船底をカットアップする日本の伝統的な捕鯨船を踏襲することにした。一方、居住設備への配慮と調査関連設備のスペース増対策として、従来型とは異なり船尾楼構造を採用することにした。また、ブリッジから前方視界を改善するため、ブリッジ前方にあったフォアマストを船橋上部に設置し、船橋自体を従来型より前部にシフトさせることにした。更に、クジラの追尾や捕獲時に必要な初動性・操縦性を向上させることを目的に、大型捕鯨船では初めての可変ピッチプロペラとシリング舵を導入することにした。

こうして船型が決まり、実際の模型を造って行った水槽試験(㈱西日本流体技研一佐世保市)には都合で立ち合うことができなかったが、ビデオを見てシャープで速力の早い、且つ小回りのきく船になるのではないかとの予感を得た。

艦装チームは、時間の経過と共に増員・強化されたが、最初のチームが結成されて約1年を経た1998年4月12日に、新造捕鯨船の起工式が内海造船(㈱田熊工場)で厳粛に行われた。4月20日以降は艦装チームも工場内に常駐することになった。工場の船台には、30数個のブロックに分けられた船体が次々に搭載され、主機関や補機といった後からでは設置できない大型機器もその都度搭載されて行くと、次第に船の様子が鮮明になってきた。設計図の扱いに慣れていない私達にとっては、想像と異なる印象を受けることもしばしばであった。6月上旬には全てのブロックが船台で繋ぎ合わされ、7月に入ると諸設備の取り付けと検査が続くことになった。設備の配置は図面通りに行かない事も多く、そのたびに関係者が協議することになるが、最年長の私を除き、艦装チームと工場スタッフの年齢差が無かったこともあって、暑い中ではあったが和気藹々で作業が進展した。

### 3. 進水式から竣工披露式まで

7月24日、ついに進水の日を迎えた。船は高山社長(当時)より勇新丸と命名された。高山社長のお孫さんが支綱を切断して進水の運びとなったが、私はただただ、勇新丸が何事もなく浮かんでくれることを念じていた。勇新丸はそんな私の心配をよそに、徐々にスピードをあげながら船台を滑り降り、見事にその雄姿を洋上に現した。隣にいた機関長と二人胸をなでおろしたが、同時に目頭が熱くなっていくのを押さえることができなくなった。進水式に列席できたことは、捕鯨一筋に生きてきた私にとって最大の喜びであった。

進水後は直ちに入渠して浮力タンクを取り外し、仮重心測定をして再度出渠した。前から見ると思っていた通りシャープな感じがするが、船尾楼となったためか横からは従来船より大きく見えた。勇新丸の主要目は表2の通りである。

艦装要員にとっては、進水後の方に作業が集中した。試運転までの2ヶ月間、漁撈、航海そして機関のあらゆる装置のチェックに追われる毎日となった。図面上でOKでも、実用面でNOとなることが多く、工場スタッフとも喧々囂々の日々が続いた。皆、少しでも良い船を造ろうと必死であった。次船の建造は工事開始を半年ずらせて、北太平洋での調査から就航させるのが適切と考えている。何かがあった場合、操業海域が近いということは、追い込まれて作業する時の安心感をもたらすと思うからである。9月16日から21日までは最終入渠期間となったが、そこで重心が計算より高くなっていることが判明した。主機の総重量が大幅に軽減されたこと、及び油圧緩衝装置を横置きから縦置きに変更したことが主たる原因とのことである。日程の都合上、固定バラストを積むことで重心を下げることにした。このような問題を抱えながらも、諸機器が設置されて船の全貌がはっきりしてくると、欲目でしょか?結構格好良く見えるようになってきた。但し、小さい問題はその後も続き、9月24日の公式運転開始日にも途中でエンジントラブルを起こして引き帰すという有様であった。翌日から始まった公式

表 2. 船舶要目表

平成 11 年 8 月 9 日

船名	勇新丸	所有者	共同船舶株式会社	
船舶番号	136641	送信機	アンワ	RT-112SB
信号符号	JLZS	送受信機	"	RS113A
漁船登録番号	TKI-1341	27MHz	"	RS107SA
船籍港	東京	150MHz	"	RU224A
進水年月	(1998)H10.7.24	150MHz	"	RSS201A
総トン数	720	受信機	"	RR107A×2
国際トン数・純トン数	1025・307			
船質	鋼			
全長 (m)	69.61			
登録長 (m)	63.94			
垂線間長 (m)	62.50	レーダー	JRC	JMA7252-9×2
型巾 (m)	10.40	GPS	古野	GP-188X
型深 (m)	5.30		"	GP-1610C×3 GTD-2200
容積 燃油槽	459.64 m <sup>3</sup>	FAX	アンワ	RF-116A
清水艙	133.83 m <sup>3</sup>			
最大搭載 人員	25	魚群探知機	古野	FCV-782
船員+其 他の者	19+6	ジャイロ	トキック	TG-6000
主機関 型式	2 サイクルクロスヘッド 型 デイゼル MANB&W6L35MC	オートパイロット	"	PR-2602
製造所	阪神内燃機工業 (株)	ソナー	カイヨー	KWS-22
連続最大出力	5280 PS	インマルサット	アンワ	RSS402B
kW 表示	3883 KW		"	RSS405A
漁船登録馬力	1500 PS	調査機器		
航海(試転最大)速力	18.714 Kl	表層生物環境モニタリングシステム	日本海洋	測定項目：水温・塩分・溶存酸素・浮遊粒子・植物プランクトン色素
燃料消費 (常用 85%負荷)	15.7 T/d	CTD プロファイラー	シーバード	測定項目：水温・伝導度・水深
燃油最大積載量	441(96%) KL	CTD ウィンチ	鶴見精機	3mm×1500m
補機	ヤマハ S165L-UN 480ps× 1200r/m 3台	XBТ システム	鶴見精機	デジタルコンバーター・スキャンコンバーター
発電機	大洋電機 AC440V×375KVA×3	ソデアックボート	ZODIAC	H533 ソーラス仕様
造水器	アトワパブル JWP-26-C80 10T/D			
冷凍機 ブルジョン	日新 2C582SE-F 1550Kcal/h 2.2KW×2台	吃水	出港時	帰港状態
		DRAFT : FORE	3m60	3m45
		DRAFT : AFT	5m53	4m87



運転での最高速力は、私が期待していた19ノットには届かなかったが、18ノット台を出すことができた。その後、工場側で最終チェックが行われ、勇新丸が我々の手に引き渡されたのは10月12日のことであった。引き渡し式の最中、いよいよこれからは乗組員だけで運航することになるとの責任の重さを感じる一方、一刻も早く自分の手で動かしてみたいとの衝動にもかられていた。10月15日に東京の晴海埠頭で予定された竣工披露式のため、式終了後直ちに不安と期待が入り交じった複雑な気持ちで自分達で勇新丸を廻航した。お披露目を無事済ませ、因島に戻る途中に台風が接近してきたため、やむなく大阪湾に待避することにした。台風は四国を縦断して岡山県に再上陸するコースを辿り、大阪湾では一時最大100ノットの風が吹き荒れた。船が風に流されぬよう脚蹠をしたが、その際に可変ピッチプロペラの効力を実感し、南氷洋でも大丈夫との自信を得ることができた。また船首部の大砲台にかかる海水の飛沫が在来船に比べて少ないことも判明した。初めての航海で台風の遭遇となった訳であるが、むしろ私達にとっては収穫大の結果となった。

#### 4. 出港と操業

下関市の強い要望があったということで、第12次南氷洋鯨類捕獲調査の出港は、全船が揃って11月6日に下関港から出港することになった。出港日前日に田熊工場から下関に廻航したが、お披露目時の着岸と同様、船体を傷つけてはいけないと、そればかりを考えて慎重になりすぎてしまった。出港は予定通りに行われたが、南氷洋に向けた航行途上にあった11月20日未明に母船が火災を起こし、結局全船が一旦内地に戻ることになった。ところで、母船の火災事故時には救援資材運搬のために本船の作業艇を数十回使用することになったが、降下・揚収作業ともに簡単且つ短時間で行うことができ非常に有効であった。この作業艇は、本船が単に捕鯨船としてだけではなく、科学調査船や取締船としても活動することを想定して搭載していたものである。荒天時にも耐えるよう設計されており、思わぬ処で活躍することになった。

火災によって捕獲調査の開始が遅れることになったが、目視調査は出来る限り実施して行なうということになり、航海能力がある本船と第2共新丸が調査母船より先に南極海に向かうことになった。西脇調査団長も乗り込み、再び南に向けて出港したのは12月22日のことであった。1999年1月13日に調査海域に到着して調査を開始した。目視活動とはいえ、確認のためにミンククジラに接近するので、母船到着までの2週間は、結果的に、私を含めた乗組員の捕獲調査に備えた絶好の訓練期間ということになった。初めて導入した可変ピッチプロペラと共に最新の船橋遠隔操縦システムは、航海中の増減速は勿論のこと、漂泊時においても氷その他の障害物に接近するような時にブリッジで何時でもエンジンを使用させることが可能で、安全対策面でも有効であることを実感した。

いよいよ捕獲調査の開始が近づくと、漁撈装置が正常に働いてくれるのかが気になって仕方がなかった。大砲の試射は終了しているものの、クジラを捕らさずして船上では先綱に負荷をかける方法がないので、特に先綱の油圧緩衝装置が心配であった。勿論、同装置の陸上テストの結果は上々で、緩衝装置は非常にスムーズに作動をしたが、陸上テストでの負荷のかけ方は単純であった。実際のクジラはもっと不規則に動くのではないかと……こうした思いが不安感を高まらせたのである。しかし案ずるよりも産むが易し、漁撈設備や装置がその配置を含め従来船と若干違うことも少なくないので、乗組員が慣れるまでに時間は要したものの、終わってみれば何事も無かったというのが実態である。より安全で、且つより効率的な作業を確保する目的で各船船長が会社宛に行うことになっている改善報告書に私が記述した内容は以下の通りである。

##### (1) 船体について

在来船に比べて船の横揺れが大きく、氷海で且つウネリが大きい時等は特に注意が必要である。例えば追尾中に大きな氷を船首でかわし、その氷が船体中央部通過の際にウネリにより大きく船体が横揺れすると氷に接触してしまう。

又、開氷海域の場合でも特に転舵による横揺

れが大きく、この為に砲手は撃ちづらく、鯨探機のはいりも悪くなる。

対策として、今航海は燃料の補給を多めにし、重心を下げ、良い状態を長く保持できる様にしたが、根本的改善のためにはビルジキールの幅を拡大する必要がある。

## (2) 舵効きについて

舵効きは非常に良い、高速(18ノット以上)にて追尾中大きく転舵すれば船の横揺れが大きくなるのは当たり前だが、当て舵を大きく取ると一層大きく横揺れする。特に右転舵の場合に顕著である。本船は左に傾く傾向があり、又針路も左に取られる傾向がある。追尾中急速にスピードダウンし、デッドスローにした場合、当然舵が効かなくなるがこの場合でもピッチを少し上げると舵は効くようになる。

スローにて追尾中(行脚7~8ノット程度)で発砲命中(直ちに機関停止)すると、その後は舵が殆ど効かないが、命中鯨がプロペラにかかる心配のない時は直ぐに機関を始動して対応した。横付け、渡鯨時での不都合はなかった。

シリング舵なので現在は舵角50度と70度に設定されている。舵角35度と70度に設定の変更を考えたが、シリング舵の利点を殺すことになり止めた。ビルジキールの幅を広げる事で良くなると考えている。

## (3) 機関の使用について

機関のコントロールは遠隔操縦装置を使用して、航海中や目視調査中は操舵室にて行い、発見追尾、横付け、渡鯨等はアッパーブリッジにて操作した。

追尾時は機関回転を一定にしてピッチにて増減速したが問題は無かった。船のダッシュは在来船よりも良いかと思う。行脚の止まるのは可変ピッチプロペラ特有で早い。今航のエンジン操作(追尾、横付け、渡鯨時)は機関部職員に担当してもらったが、機関操作盤のテレグラフの位置を船長側に移動すれば船長一人での操作が可能である。

船の速力はある程度燃料を積んだ方が速くなると思った。追尾能力は速力の速いことが一番の条件になる。

横付け時の機関の使用はなるべく行脚を押さえて、後進の使用を最小限にすれば船尾が左に切り上がる為に母船との接触はない。今航は母船の手前で機関を止めて行脚だけで接近するスタイルでの方法を取り非常に有効であった。横付け後も船の横揺れが大きかったので注意が必要であるが、危ない時は母船に1~2ノットで走ってもらった事が船の接触防止上有効であった。

## (4) 象の鼻(パウローラー)

縦ローラー及び水平ローラー付近の仕上げに問題があつて擦れに依る先綱の切断及び摩耗が捕獲調査が始まってまもなく発生した。

砲台の象の鼻に足場を組んでの修理で、ロープの擦れは解消されたので今後はこれを参考にして改良すれば良いと思う。元綱ワイヤーを使用していないので、第25利丸と同様に縦ローラーを除去してパウローラーのみの型式にしてはと云う意見もあった。

## (5) 大砲台木甲板について

現在3度の傾斜をつけている(これはトリム2mにおいて木甲板が水平になる様に設計したため)。

この傾斜角は砲手のメンタルな面に影響を与える可能性がある。現在の木甲板の高さは体の小さい竹下砲手に丁度のようなので、他の砲手が乗船する時は少し下げることになるが傾斜角も、その時点で調整したら良いと考えている。

## (6) 砲座の位置について

在来船に比べて500m/m程後方にあるが、大角度や近撃ちの場合で更に色々な条件が重なると先綱がパウローラーからはずれて、縦ローラー上部にのることが懸念されるため、出来れば前方に移動させた方が良いと思っている(同型式の第1京丸でもこの様に発生したことがあり、第25利丸は殆ど無い)。

## (7) ピンチローラーについて

殆ど使用できない不良品であった。改良の要あり。

## (8) ウインドラス&キャブスタン

吊鯨作業においてサイドに鯨を引き寄せる時に使用しているが、回転が遅くて荒天時等では危険でありドラムの径を大きくする必要がある。

#### (9) 捕鯨ウインチ及び油圧緩衝装置について

作動状態は良好であったが、油圧緩衝装置についてはテンションマークが砲台より見難い点、捕鯨ウインチについては、アッパーブリッジからウインチドラムが見難い点を改良する必要がある。

#### (10) ブリッジ及び各居室と司厨部

ブリッジは見通しも良く、この点は航海の安全性を重視した設計の効果と思われる。

各居室については乗組員の満足感を得られている。いまからの船はこの様な型になっていくことであろう。賄部は一人体制となったため忙しいことは仕方ないが、新しい厨房機器も使い

こなし特に問題は無かった。いつもきれいな食堂での食事が楽しみであった。

#### (11) その他

調査関連設備については、調査員が操作して乗組員は補佐として作業にあたったが、特に問題は無かったと聞いている。

以上である。処女航海終了直後の改善要求としては驚くほどに数が少なく、小規模な工事である。造船会社側を含め捕鯨船を造った経験者が皆無の中で誕生した勇新丸ではあるが、一人前の捕鯨船として十分活動したと断言することができる。私は勇新丸処女航海終了直後に定年を迎えて共同船舶㈱を退職した。上記の改善要求には、37年間捕鯨船員として過ごしてきた私の、勇新丸を更に優れた捕鯨船に成長させて欲しいという後輩諸君に対する願望も含まれている。



図1. 調査中の勇新丸。

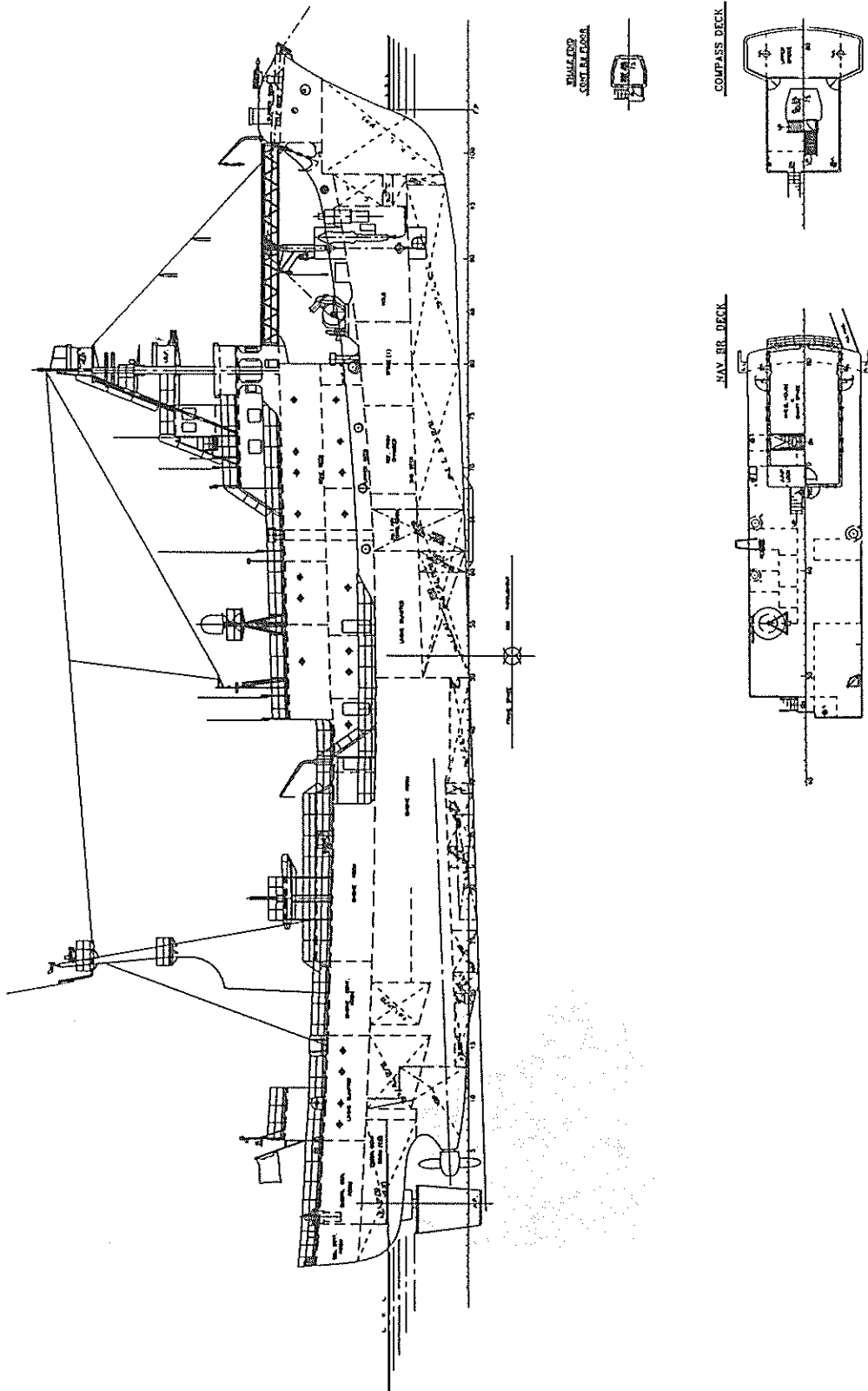


図 2. 一般配置図 (その 1)。

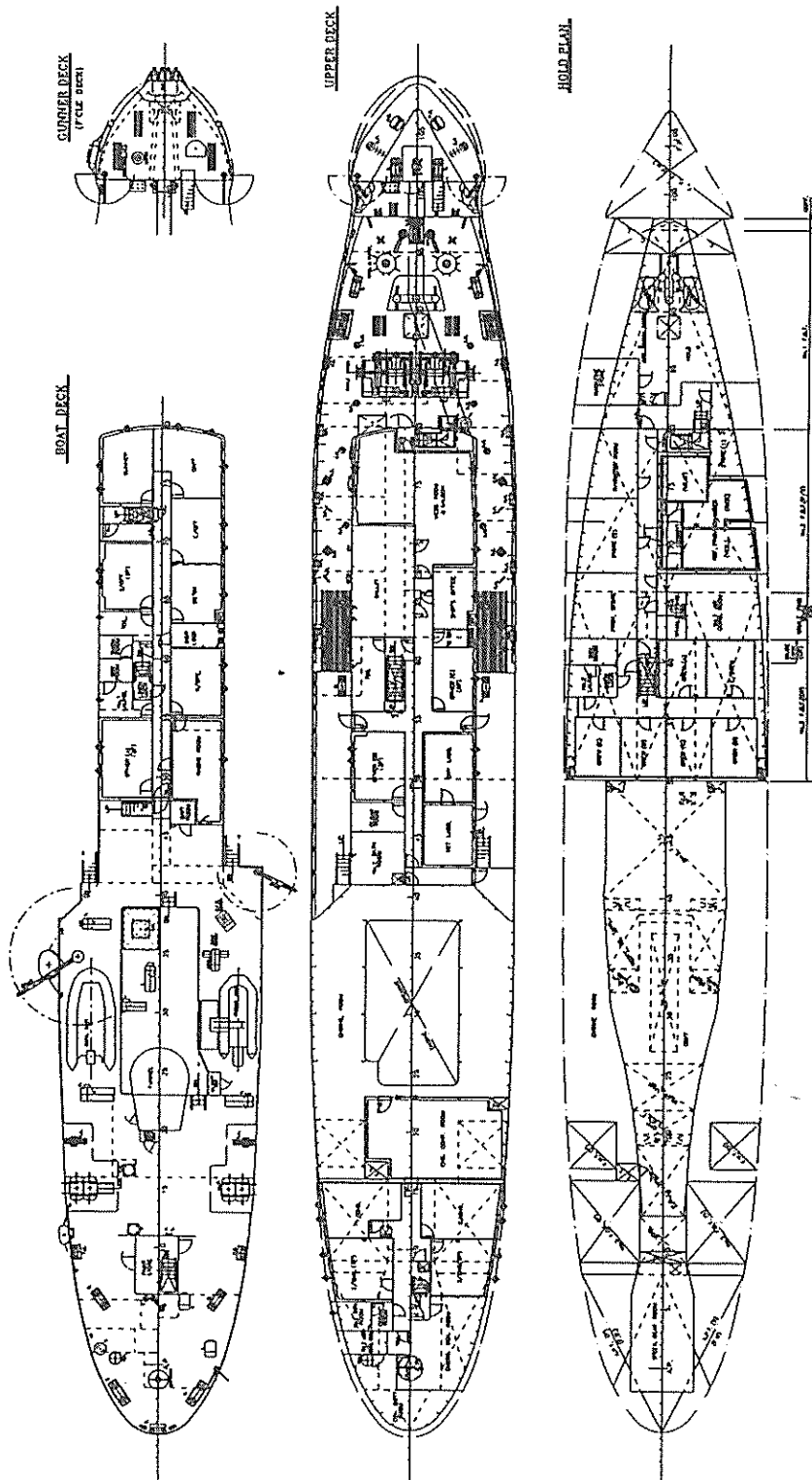


図3. 一般配置図 (その2)。

## 日本鯨類研究所関連トピックス (1999年6月～8月)

## 第51回IWC年次会議報告会の開催

グレナダ国の首都セントジョーンズにおいて5月に開催された第51回IWC年次会議の報告会が、6月9日から22日に掛けて、網走市、札幌市、仙台市、宮城県牡鹿町、東京都、千葉県和田町、名古屋市、和歌山県太地町、大阪市、福岡市で開催され、当研究所から大隅理事長、猪瀬・山村の両理事が参加した。

## 第6次北西太平洋鯨類捕獲調査船団の出港

北西太平洋ミンククジラの系統群構造を解明するために必要な情報の収集と、日本周辺海域における生態系に果たすミンククジラの役割の解明を調査目的として、6月15日、調査母船・日新丸が因島市・日立造船因島工場岸壁から、目視採集船・勇新丸が同・内海造船因島工場岸壁から、目視採集船第1京丸及び第25利丸が下関市・サンセイ下関工場岸壁からそれぞれ調査海域（北緯35度以北・東経150度以西の北太平洋及びオホーツク海沿岸域、ただし、外国200海里水域を除く。）に向け出港した。当研究所から藤瀬調査団長ほか8名が参加した。

## 第12次南氷洋捕獲調査副産物販売勉強会の開催

6月17日、調査副産物1729トン（ミンククジラ389頭分）の販売処理について、水産庁長官に対する承認申請に先立ち、流通関係業者・地方公共団体等の関係者の参加を得て、当研究所会議室において、販売勉強会を開催した。

今回の製品は日新丸の火災により空冷方式により凍結されており、グレーズを行っていないため、出来得るだけ早く販売する必要がある状況の下で、卸売業者、仲卸業者、販売参加者及び加工業者は①鯨食文化の持続、捕鯨存続と再開及び鯨類の持続的利用の達成②製品にエコラベルの貼付③イベントへの積極的参加と製品の安価提供④イベント及び即売会でのチラシ、パ

ンフレット等の配布等を行って国民の理解が得られるよう努力すべき旨合意された。

## 職員の採用

7月1日付で、調査部に和田淳を採用した。

## ロシア・ノルウェイ出張

大隅理事長は水産庁森下捕鯨班長、遠洋水研加藤研究室長と同行し、6月27日から7月4日の間にロシアとノルウェイに出張した。

## 当研究所評議員会・理事会の開催

7月16日開催された評議員会において、中村晃次理事の辞任に伴う欠員の補充と理事の定数12名を確保するため、新たに理事として島一雄氏、高橋順一氏、村上光由氏の3名が選任された。

また同日、引き続き開催された理事会において、空席となっていた専務理事の互選を行い、村上光由氏が8月1日付けで就任することとなった。また、稲垣元宣氏が評議員を辞任し、後任として中島圭一氏が7月16日付けで承認された。

なお、当研究所の島一雄顧問が7月1日付けで海洋水産資源開発センター理事長に就任されたのを機に、6月30日付で退任したことが両会で報告された。

## 第6次北西太平洋鯨類捕獲調査船団の入港

捕獲調査船団は、調査が好天に恵まれたこと、ミンククジラの分布密度が高かったことなどにより、予定より早く調査を完了し、調査母船・日新丸は7月21日東京港大井埠頭に、19日には目視採集船第25利丸が下関港に、第一京丸が塩釜港に、20日に勇新丸が因島市田熊にそれぞれ入港した。

## 夏季合同水産記者会見の開催

7月22日当研究所会議室において、水産記者クラブメンバー10名の参加を得て、大隅理事長が第12次南氷洋鯨類捕獲調査及び第6次北西太平洋鯨類捕獲調査事業の結果及び最近における捕鯨をめぐる問題や新捕鯨構想などについて語った。

#### FAO作業部会への参加

大隅理事長と袴田研究員はナミビア国スワコップムンド市で8月16日～18日の間、FAOが主催する「多魚種資源一括管理システム検討作業部会」に参加した。

#### 第29回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標記会合が、8月19日午後当研究所会議室において21名の参加の下で開催された。今回は、海洋環境生物研究所の笠松不二男氏が「安定同位体対比や放射性同位体でみる食物網」、遠洋水産研究所の大泉宏氏が「イシイルカ筋肉中における窒素・炭素安定同位体対比」、三重大学生物資源学部の白木原国雄氏が「生態系を考慮した資源管理研究の動向 —1998年アラスカシンポジウムに参加して—」と題する話題を提供し、それらの話題について質疑応答が行われた。

#### ノルウェー捕鯨事情報告会の開催

調査部石川採集調査室長が、ノルウェー獣医学大学準教授 Dr. Egil Ole Øenの招待を受け、6月21日～7月23日の約1ヶ月間、ノルウェーを訪問し、新爆発鮫先の構造及び捕鯨用各種漁具についての調査を行うとともに、捕鯨船に乗り組み、捕獲、解剖及び加工方法等の調査を行った。更に各種研究調査、監視員制度の実態についても詳細な調査を行い、その結果について、8月23日当研究所会議室において関係係30名の参加を得て、報告会を開催した。

#### ミナミマグロ裁判への参加、米国・ノルウェー出張

飯野法学研究室長は、国際海洋法裁判所（ドイツ・ハンブルグ）でのミナミマグロ裁判に関連する暫定措置の審理（8月18日～20日）に参加するため、8月11日から25日まで日本代表団に加わり出張した。6月1日に日本がオーストラリア西の公海上でミナミマグロ調査漁獲を開始したことに対し、豪州・NZが国連海洋法条約に基づく仲裁裁判による紛争解決を求めた。本件はこれに関連して、原告2ヶ国が調査中止等を含む暫定措置を求め、国際海洋法裁判所に提起したもの。

これに前後して、小松漁業交渉官に同行し、11日から14日まで米国に、22日から24日までノルウェイに、それぞれ出張した。

### 日本鯨類研究所関連出版物等 (1999年6月～8月)

#### [印刷物]

当研究所：北西太平洋ミンククジラ捕獲調査(JARPN)の研究成果について。日本鯨類研究所，1999/5。

当研究所：鯨研通信，402：28pp. 日本鯨類研究所，1999/6。

当研究所：捕鯨をとりまくこの1年1999年(前期)。日本鯨類研究所，1999/7。

藤瀬良弘：JARPA調査において採用されているランダムサンプリング法と今後の課題。鯨研通信，402：1-10，1999/6。

Iino, Y. : Treaty Implementation : the 1946 International Convention for the Regulation of Whaling. *System Compliance in Ocean Management. Southeast Asian Programme in Ocean Law, Policy and Management* : 189-193, 1999.

石川 創：日本海の鯨類のストランディングレコード。日本海セトロジー研究，9(9):15-20，1999/8。

大隅清治(監修)：クジラの不思議をさぐってみよう。ピポバル，4(3):4-10，1999/6/1。

大隅清治：鯨物語（連載）。朝日新聞，1999/6/9.～8/30。

- 大隅清治：「税金泥棒」と「悪徳弁護士」。遠洋水研OB会会員便り，3:6-7, 1999/8.  
 大隅清治：新捕鯨構想実現へ。水産タイムス，1999/8/23.  
 島 一雄：運動の輪を広げよう。水産タイムス，1999/8/23.  
 田村 力・大隅清治：世界の海洋における鯨類の食物年間消費量。鯨研通信，402:10-22, 1999/6.  
 田中昌一：提言:水産資源学研究は今何をなすべきか。月刊海洋，号外 17:210-215, 1999/5.  
 山村和夫：産業界の動向 国際条約と鯨資源。産業教育，591:42-45, 1999/7/10.

## [学会発表]

- 石川 創・西脇茂利：日本における海の哺乳類の現状と人間との関係。第5回日本野生動物医学大会  
 大会シンポジウム，1999/7/3.

## [第51回IWC技術委員会関係会議提出文書]

- Ishikawa, H. : Research activity on whale killing methods in the Japanese Whale Research program in  
 the Antarctic Sea and North western Pacific Ocean (JARPA and JARPN). WORKSHOP ON  
 WHALE KILLING METHOD IWC51, 1999.

## [放送・講演]

- 猪瀬侃紀：第51回IWC会議報告。仙台市中央卸売市場管理棟会議室，1999/6/11.  
 猪瀬侃紀：第51回IWC会議報告。牡鹿町公民館，1999/6/11.  
 石川 創：毎日放送MBSナウ 環境シリーズ「天空地水」。毎日放送，1999/6/18.  
 Martinez, I. and Pastene, L. A. : RAPD typing of North Atlantic and western North Pacific minke whales,  
*Balaenoptera acutorostrata*. The International Council for the Exploration of the Sea(ICES),  
 Annual Science Conference, Cascais, Portugal, 1998/9.  
 大隅清治：第51回IWC会議報告。東卸会館会議室，1999/6/10.  
 大隅清治：第51回IWC会議報告。太地町公民館，1999/6/11.  
 大隅清治：第51回IWC会議報告。名古屋市中央卸売市場内庁舎会議室，1999/6/12.  
 大隅清治：日本における捕鯨の歴史と鯨類資源の調査研究。VNIRO, ロシア，1999/6/28.  
 大隅清治：国際捕鯨委員会とクジラとマグロ。マリンインパクト21第11回フォーラム東京，1999/7/29.  
 Pastene, L. A. : Management and conservation of large whales in the context of the International  
 Whaling Commission(IWC). Lecture carried out within the activities celebrating the Chilean  
 "Month of the Sea". Talcahuano, Chile, 1999/5.  
 田村 力：クローズアップ現代 クジラで魚資源が危機？ 保護か捕鯨か。NHK，1999/6/14.  
 山村和夫：第51回IWC会議報告。福岡市中央卸売市場会館会議室，1999/6/9.  
 山村和夫：第51回IWC会議報告。大阪市中央卸売市場業務管理棟大ホール，1999/6/10.  
 山村和夫：第51回IWC会議報告。網走市漁業協同組合会議室，1999/6/18.  
 山村和夫：第51回IWC会議報告。札幌市高橋水産(株)会議室，1999/6/19.  
 山村和夫：第51回IWC会議報告。和田町コミュニティーセンター，1999/6/22.  
 山村和夫：クジラの話。ホテル・マリナーズコート東京，1999/7/3.

## [新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・反捕鯨側が条約管轄外に重点 RMS完成で遅延作戦：日刊水産通信 1999/6/1.
- ・不当な主張繰返す反捕鯨国 島IWC代表帰国会見：日刊水産経済新聞 1999/6/4.
- ・反捕鯨国は永久禁止の考え IWC島コミッショナーが帰国談：日刊水産通信 1999/6/4.
- ・島代表がIWC総会で総括 従来路線貫き支持拡大へ：みなど新聞 1999/6/4.



- ・ 10日にIWC報告会 日本捕鯨協会が開催：日刊水産通信 1999/6/9.
- ・ 「反捕鯨国に危機感」IWC総会報告会 水産庁職員らが説明：毎日新聞 1999/6/13.
- ・ ミンククジラ 数年先には捕獲枠？ 太地でIWC報告会 水産庁など見解：朝日新聞 1999/6/13.
- ・ 日本の主張すべて否決 太地 IWC総会の報告会：産経新聞 1999/6/13.
- ・ 反捕鯨国が守勢に立つ 太地 IWC年次総会の報告会：紀南新聞 1999/6/13.
- ・ 会議は硬直化が進んだが…… 太地町でIWC総会の報告会：南紀州新聞 1999/6/13.
- ・ 加盟国増加 今後の有効戦術に 反捕鯨国の態度非難 IWC報告会 島コミッショナー指摘：日刊水産経済新聞 1999/6/14.
- ・ 加藤速水研究室長が記念講演 鯨類研究で科技厅長官賞：日刊水産経済新聞 1999/6/14.
- ・ 対応、根本的見直し 捕鯨を守る会関西支部 IWC報告会：みなと新聞 1999/6/14.
- ・ きょう99年度調査船団出港 北西太平洋でミンク鯨100頭捕獲へ：みなと新聞 1999/6/15.
- ・ 北西太平洋の鯨類調査できょう出港 日新丸：日刊水産経済新聞 1999/6/15.
- ・ 北西太平洋鯨類調査今15日、船団が出港：日刊水産通信 1999/6/15.
- ・ 広島県因島と下関から出港 北西太平洋鯨類調査：みなと新聞 1999/6/16.
- ・ 捕鯨関係者集う グレナダの大臣も連帯表明 第51回IWC報告会：みなと新聞 1999/6/18.
- ・ 北鯨の調査へ出港：水産タイムス 1999/6/21.
- ・ 名古屋でもIWC報告会「IWCは変革の時」：みなと新聞 1999/6/21.
- ・ 7月3日にクジラ問題でセミナー：日刊水産経済新聞 1999/6/22.
- ・ 札幌でIWC年次会合報告会 市場関係者ら60人出席：みなと新聞 1999/6/23.
- ・ 価格赤肉で3270円 第12次南水洋調査副産物 1729トン販売 鯨研：みなと新聞 1999/7/1.
- ・ 鯨肉1千729トン販売 日鯨研 数量と価格を発表：日刊水産経済新聞 1999/7/1.
- ・ ミンク鯨の肉 鯨研価格据置：日刊水産通信 1999/7/8.
- ・ 日本で初の展示へ 新下関水族館、シロナガスクジラの骨格標本：日刊水産経済新聞 1999/7/12.
- ・ 専務に村上光由氏 日本鯨類研究所：みなと新聞 1999/7/19.
- ・ 新理事に島氏ら 日本鯨類研究所：日刊水産経済新聞 1999/7/19.
- ・ 鯨研が評議委員会・理事会 専務に村上光由氏就任へ：日刊水産通信 1999/7/19.
- ・ 25利丸下関に：みなと新聞 1999/7/21.
- ・ 新たな科学的知見など きょう「日新丸」入港式 第6次北西太平洋調査捕鯨船団：みなと新聞 1999/7/21.
- ・ きょう入港式 日新丸、大井水産埠頭で：日刊水産経済新聞 1999/7/21.
- ・ 系統群解明に大きな成果 鯨類調査母船・日新丸入港式：日刊水産経済新聞 1999/7/22.
- ・ 鯨類調査船団帰国 新たな知見持帰る 北西太平洋：日刊水産通信 1999/7/22.
- ・ 計画より1ヵ月早く100頭捕獲 第6次北西太平洋調査捕鯨で日新丸が入港式：みなと新聞 1999/7/22.
- ・ 新・捕鯨構想提案へ 大隅・鯨研理事長会見：みなと新聞 1999/7/26.
- ・ 南水洋調査の新計画も 大隅・鯨研理事長が会見：みなと新聞 1999/7/26.
- ・ 鯨研専務就任の村上氏 伝統継ぎ、新たな方向付けも：みなと新聞 1999/7/26.
- ・ 鯨研専務に村上氏：水産タイムス 1999/7/26.
- ・ 捕獲調査の将来で所信 大隅・鯨研理事長会見「新捕鯨構想」も：日刊水産経済新聞 1999/7/26.
- ・ 日本鯨研の大隅理事長 南北調査終了で記者懇談 新捕鯨構想を世界に提示：日刊水産通信 1999/7/27.
- ・ 新捕鯨構想めざす 日鯨研大隅理事長語る：水産タイムス 1999/8/2.
- ・ 94～99年北西太平洋ミンク鯨捕獲調査結果 漁業影響大きい捕食量：みなと新聞 1999/8/7.
- ・ ミンククジラ特売 太地町：日刊水産経済新聞 1999/8/13.

- ・スポット 日本鯨類研究所専務に就任した村上光由氏 捕鯨の必要性を説明、PR：日刊水産経済新聞 1999/8/25.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・鯨と人間が魚を取り合う漫画 高木岑生・画：ECO 1999/5/27.
- ・鯨と人間が魚を取り合う漫画 高木岑生・画(憂国妄言「鯨より天然痘を救え！」異見あり)：週刊文春 1999/7/1.
- ・日本鯨類研究所意見広告に掲載されたミンククジラのイラスト 高木岑生・画(読者が選ぶ意見広告)：読売ADリポート OjO 1999/7.
- ・南極海鯨類捕獲調査船団が帰港 事故・妨害を克服し、大いなる成果を達成：勇魚通信 1999/7.
- ・鯨類捕獲調査船団 北西太平洋へ出港：勇魚通信 1999/7.
- ・北西太平洋ミンク鯨調査へ：水産週報 1999/7/5.
- ・IWC代表団の健闘を称える：水産週報 1999/7/5.
- ・調査捕鯨の目的達成を！「日新丸」船団が出港 ミンク100頭を調査：水産世界 1999/7/15.
- ・特集 捕鯨は必要か！？ 水産資源としての鯨類の有効性を考える：SAKANA 1999/8.
- ・鯨研が調査副産物を販売：水産界 1999/8.
- ・鯨類調査船団、日新丸帰港：水産週報 1999/8/5.
- ・第6次北西太平洋鯨類捕獲船団が帰港：水産庁1994年から現在までの調査成果を公表 漁業とクジラの競合関係が明らかに：水産世界 1999/8.
- ・新たな対応を検討の時期 第51回IWC年次会合が閉幕：漁政の窓 1999/8/15.

## 京きな魚 (編集後記)

暑かった夏も漸く終り、研究所内では“バックアイス”、“沖アミ”といった言葉が飛び交うようになってきました。南極海捕獲調査とSOWER調査の準備が本格化してきたのです。

今夏実施された第6次北西太平洋捕獲調査は、日本海側を除く北海道周辺が調査対象海域となりましたが、予想以上にミンククジラの分布密度が高かったことと好天に恵まれたことから、予定より1ヶ月も早く調査を終了することができました。そのためもあって今年は例年以上に夏休みを取った職員が多かったようです。

「兎に角、処女航海を無事に終えてホットした気持ちで一杯、暫くは釣三昧で過ごしたい」と渋っていた鈴木重勇さんに頼み込んで、勇新丸建造に係わる文を投稿して貰いました。文中にもありますが、現代技術をもってしても船の建造は図面通りに行かないそうで、艤装員として建造に係わった船員が責任を全うするとの観点から当該船舶の処女航海に乗船するというの

が慣例になっているとのことです。

鈴木さんは今から1年以上も前に退職年齢(定年)に達していたそうですが、それを延長して身をもって勇新丸の安全性と効率性を確認してきたこととなります。本当にお疲れ様でした。

当てにしていた原稿が間に合わない！編集を担当していると時々遭遇せざるを得ないことです。そうした時に頼りになるのは矢張りベテランです。短時間で新しい文書を作成して下さるか、あるいは未発表の原稿が引き出しの中に眠っていて、それを提供したりして下さるからです。今回の田中昌一顧問の場合がそうでした。予定通りに本号を出版でき、唯々感謝です。

本年6月9日から朝日新聞夕刊科学欄で30回に亘り連載された「鯨物語」を読まれたでしょうか。大隅理事長が執筆した記事ですが、朝日新聞を購読していない方のためにも30回分を纏めて紹介する方法を検討中です。

(山村和夫)

# ストランディングレコード (1999 年 2 月 ~ 5 月受付)

No.	種名	評数	雌雄	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考	
0-645	コマコウ	B	1	1	神奈川県 茅ヶ崎市海岸(相模湾)	750708	漂着	生存→ 腐骨	2.05	体重 46kg.	江ノ島水族館				江ノ島水族館で保護するが翌日死亡。	
0-646	セミホカ	B	2	1	神奈川県 横須賀市長井海岸(相模湾)	760324	漂着	生存→ 腐骨	1.91	肌+雄 191.0cm /雌 227.0cm	江ノ島水族館			骨格(国立科博)	江ノ島水族館で保護するが760326死亡。	
0-640	オホキハタシラ	A	1	北海道	利尻郡利尻富士町大磯(利尻島)	961000	漂着	死亡		腹部に食害あり。	佐藤晋彦	国立科博山田				
0-652	シノホカ	C	1	北海道	天塩郡豊高町権味内	980527	漂着	死亡		ほぼ白骨化。	佐藤晋彦	国立科博山田				
P-041	コマツアサシ	B	1	1	石川県 鳳至郡門前町吉浦砂浜	981220	漂着	生存			桶田俊郎	のどと毛島海公園水族館			無し	数日後泳ぎ去る。
0-627	カマホカ	A	1	石川県	輪島市大野町福井海岸	990122	漂着	死亡	2.23		桶田俊郎	のどと毛島海公園水族館			他報告者;山田裕(国立科博)。新聞記事(北園990123)。	
P-042	コマツアサシ	A	1	北海道	小樽市朝暹海岸(石狩湾)	990200	漂着	死亡		腐敗。	木村方一	北海道教育大学札幌校				
W-155f	シノクサ	A	1	石川県	奥至郡能登町字鱒川	990208	流獲(大型定置網)	生存→ 死亡	4.00		新田豊	能登町漁業協同組合			無し	早期発見。地元消費。
EX5046	シヨウ	A	2	沖縄	国頭郡金武町アカヒ-子簡約3km	990215	目視情報	生存			山田裕	国立科学博物館			無し	13:55流線新聞記者が空撮。親子の可能性大。
0-625	ハナゴンドウ	B	1	茨城	高萩市有明町	990220	漂着	生存→ 腐骨	2.00	背部と胸部に裂傷。頭部2日後死亡。	吉岡基	三重大学生物質感応部				大洗水族館で保護治療したが7/27/8:00AM死亡。同館で剖検。
0-626	ハナゴンドウ	A	1	高知	高知市能名地先	990220	漂着	死亡	2.40	体表剥離。	菊池達人	高知県立漁業指導所			無し	埋却。
0-629	オホキハタシラ	B	1	1	福岡県 糟谷	990225	漂着	死亡	4.62	吻部破損。鮮度良。詳細計測有り。	長澤一雄	山形県立博物館				16:00発見。現地調査後国立科博へ輸送し7/27剖検。他報告者;山田裕(国立科博)。新聞記事(山形990227)。
0-628	オホキハタシラ	B	1	1	青森 北津軽郡市浦村脇元	990228	漂着	死亡	4.40		山田裕	国立科学博物館				国立科博。東大海洋研が現地調査。
0-630	コマコウ	B	1	1	沖縄 石垣市豊野	990228	漂着	生存→ 死亡		体長約2m。	堤裕史	沖縄県中部高等学校				10:00AM発見。干潮でワフに取られ、発見者が救助を試みたが暴れて海中に戻せず死亡。

No.	種名	群数	雌雄	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考	
0-638	オキナゴジラ	0	1	秋田	本荘市石巻浜	990228	漂着	死亡		体長約3.3m、 歯の萌出無し。	柴田理 ジ-研究グループ	日本海トラ ジ-研究グループ			3/2調査。他報告者：山田格(国立科 博)。新聞記事(秋田魁990303)。	
H-1581	シロクジラ	A	1	長崎	上県部上対馬町大 字西泊地先	990228	泥獲(定 獲網)	死亡	4.10		平間千弘 長崎県上対 馬町役場	長崎県上対 馬町役場		脂皮(日鯨研)	埋却。	
H-1561	サメクジラ	A	1	高知	高知市高知町三 津沖1.5マイル	990301	泥獲(中 型定置 網)	死亡		体長約8m。	長岡友久 シヤ	高知市立 シヤ		脂皮、フゾク(日 鯨研)	11:00AM発見。地元消費。	
H-157	サメクジラ	B	2	沖縄	石垣市名瀬浜	990304	湾内迷入	生存		親子	岡田正吾 ATELIER PO RPOISE	新聞情報(八 重山毎日9903 07)		無し	9:00AM発見。水深5-6mの浅瀬まで接近 したので地元住民らが船で沖へ誘導し た。	
0-639	ゴマッコ	B	1	茨城	東茨城郡大洗町大 洗沖ビーチ	990306	漂着	生存→ 飼育	2.15	体重155kg、体 長体重は新聞 記事による。	山田格 国立科学博 物館	国立科学博 物館	新聞情報(茨 城990307)			5:00AM発見。海に漂そうとしたが動か ないため、大洗水族館に約1時間かけて 輸送保護した。
H-159	サメクジラ	A	1	千葉	鴨川市江見内郷野 江見海水浴場	990307	漂着	死亡	7.50	腐敗、表皮剥 離。性別不 明。	海獣展示 員	鴨川シー ワールド		鯨部表皮、筋(鴨 川シーワールド)	朝発見。他報告者：山田格(国立科博)、 斎野重夫、新聞記事(朝日/千葉日報99 0308)	
0-647	ハクゴジラ	B	1	石川	珠洲市仁江町 岩場	990317	漂着	死亡	3.06	死後数日経 過。	福田俊郎 三重大学生 海公團水技 師	のよしま 海公團水技 師	下吉晴(珠洲 市役所)		埋却。	
0-631	オキナゴジラ	A	1	新潟	佐渡郡佐和田町沢 根村(佐渡島)(真 野島)	990324	漂着	生存→ 放流→ 死亡	3.84	体重72kg	吉岡善 物産源字部	三重大学生 物産源字部	新聞情報(新 潟7日本報)	国立科学博物館	佐和田漁協が救助活動を行方か再漂 着。3/25行方不明となったが3/26死体で 漂着した。国立科博で3/27剖検。日鯨研 職員参加。他報告者：山田格(国立科 博)。新聞記事(産経990325、新潟日報9 90326)。	
0-635	オナメ	B	1	千葉	銚子市忍町利根川 河口より約10km上 流	990327	泥獲(ウ チナギ 網)	死亡	0.86		宮内幸雄 銚子海洋研 究所	銚子海洋研 究所		国立科学博物 館、脂皮(日鯨 研)	3:00AM発見。国立科博で剖検。	

\*表中の「評」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日鯨研職員が調査や写真等によって鯨種を確認した場合、Bは他の研究者の方が鯨種の判定を行った場合、Cは鯨種の判定はされて  
いても判定者が不明で判定に疑問がある場合や、判定が確定による所が多い場合を示しています。また「疑」「疑」各欄は、漂着総数のうち疑いが判明した数のみを記入してあります。「体  
長」はmで記載してあります。記録番号の頭文字の“O”はハクゴジラ、“M”はヒダクゴジラ、“P”は鯨類(アシカ、アザラシ等)を示します。“EX”はストランドインゴの分類(鯨  
研通信387)にはあてはまらないものの、希少種の目撃や珍しい事例について寄せられた情報を紹介しています。

\* (附) 日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、泥獲した鯨類の情報(ストランドインゴ)の収集、記録を行っており、ストランドインゴを発見したり、新聞記事などの情報がご  
さいましたら、ぜひ日本鯨類研究所までご一報くださいますようお願いいたします。

No.	種名	経度	緯度	種名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-632	コウハシラ	A	2	2	徳島都赤羽根町越戸海岸	990329	漂着	生存1 →同育 /死亡1	4.49	親子と思われ る。母獣448cm 782kg、子261c m204kg、子の み生存。詳細 計測値有り。	約藤昌幸	附知多ヒ ナツト	第一発見者; 河合正泰(632 a)、田中宏樹 (632b)	脂皮(日録研)、 各種臓器(ヒナツ ト)、病理組織 (国立科博/鳥取 大)、血液(大阪 府立大)、汚染物 質標本(愛媛大/ 環境庁)、DNA分 析標本(国立科 博/三重大/東大 海洋研大観)他 詳細資料あり。	9:00AM越戸で成獣の死体を、9:50AMに の東側の1kmで成獣の死体を発見。生 存個体は夕刻情報多ヒナツトで保護取 寄せ翌日より須磨給飼開始。3/31死亡個 体をヒナツト、国立科博、三重大、大阪府 立大、江ノ島水族館、日録研で剖検。幼 獣は4/1早朝水櫃内で死亡を発見、同日 ヒナツトで剖検。VTRあり。新聞記事(毎 日/共同通信/時普通通信ニュース速報99032 9、中日/読売990330、中日/朝日0331、中日 0401)。他報告者:福永純子(志摩半島 野生動物研究会)、吉岡基(三重大)、寺 沢文男(江ノ島水族館)、浅木裕恵(ス ク)。
0-633	イカウエマコウ	B	1	1	鎌倉市材木座海岸 (相模湾)	990330	漂着	生存1 放流	2.20	体重推定30kg ♀。全身に瘀 過傷。	寺沢文男	江ノ島水族 館	無し	無し	7:20AM発見。警署署員らが海へ戻すが 再漂着。江ノ島水族館職員が現場で拾 得し9:55AM漁船で沖合1kmに放流。他報 告者:吉岡基(三重大)、石川創(日録 研)、菅野重夫、山田和彦(おさかな普及 センター資料館)、山田裕(国立科博)。新聞 記事(朝日/毎日/読売/神奈川990331、 共同通信ニュース速報990330、神奈川9905 03)。新聞報道ではコウエマコウ。
0-634	マカ	B	1	1	神奈川 藤沢市江ノ島沖 (相模湾)	990330	漂獲(剖 検)	死亡	2.09	体重102kg。 歯数47-48。 妊娠、胎子長6 1.5cm。胃 内容コソコ	寺沢文男	江ノ島水族 館	第一発見者; 源善丸	脂皮、肝、血液 (環境庁)、脂肪 新肝腎(愛媛大/ 国立科博/東大 大観)、各種臓器 (鳥取大/国立科 博/東大大観)、 胃内容、骨格、著 生虫(国立科博)	3/31国立科博で剖検、ヒナツトと鑑定。他 報告者:山田裕(国立科博)、山田和彦 (おさかな普及センター資料館)、新聞記事 (神奈川990331)。新聞報道ではスシイカ 丸。
0-636	カマカ	A	1	1	豊北町角島元山港	990331	漂着	死亡	1.82	鮮度良。背鱗 形状から雄と 思われる(国 立科博鑑 定)。	戸島昭	山口県文書 館	第一報告者; 藤岡茂夫	海岸に漂却。他報告者:山田裕(国立科 博)。	

No.	種名	評 定	雌	県 名	位 置	年 月 日	状 況	生/死	体 長	生 物 情 報	報 告 者	所 属	情 報 源	標 本	備 考
S-014	シジュウ	B	1	沖縄	国頭郡東村空城	990401	漂着	死亡		体長約3.2m、 翼展、一部白 骨化。	松岡正道	出光興産	新聞情報(琉 球新報99040 7)	香格(国営沖縄 記念公園水族 館)	標本は東村に建設予定の博物館に展示 する予定。他報告者;山田格(国立科 博)。新聞記事(沖縄タイムス990402)。
M-160	シカヅラ	A	1	兵庫	豊岡市津島(山地先 線ヶ坂下) 岩場	990405	漂着	死亡		体長約4.5m、	漁野真弘	純誠アソシ エイト		無し	14:00頃死体漂流を発見後漂着。回収不 能につき放置。
O-649	オウキハツシラ	B	1	秋田	總代市浅内浜	990408	漂着	死亡	4.70	体重1500kg。 胃内はコシの み、肋骨2本骨 折。	山田格	国立科学博 物館	新聞情報(秋 田魁990411)	皮膚他(国立科 博)	4/10工藤英美氏(日本海セロウ-研究グル -プ)が調査。埋却。
O-637	オウキハツシラ	A	1	北海道	利尻郡利尻町沖 (利尻島)	990411	漂着	死亡			佐藤雅彦	利尻町立博 物館	国立科学博山田 格博士経由	頭骨、骨盤骨(利 尻町立博物館)、 脂皮(日経研)	4/13標本調査。
O-642	ネズミノカ	C	1	北海道	利尻郡利尻町街法 志字神磯(利尻島)	990411	漂着	死亡	1.65	歯度良。狂 疑。	佐藤雅彦	利尻町立博 物館		雷(利尻町立博 物館)	カラスによる食害有り。
M-161	シカヅラ	C	1	北海道	天塩郡遠別町巻明 宇津々橋	990413	漂着	死亡	7.40	腐敗。	佐藤雅彦	利尻町立博 物館	新聞情報(北 海道990416)、 国立科学博山田 格博士経由	雷(国立科学博 物館)	町内廃棄物処分場にて埋却。他報告者; 山田格(国立科学博)。新聞記事(室蘭民 報990414)。
P-040	コマツツシラ	A	1	島根	霞川郡大社町中荒 木堀川上流約500m	990414	漂着	生存→ 腐敗	1.10	体重20kg。糞 弱。	吉岡基	三重大学生 物質科学部	新聞情報(共 同通信ニース 速報990414)		7:00AM頃発見。しまね海洋館で保護。他 報告者;石川利(日経研)、山田格(国立 科学博)。新聞記事(スポーツ/中国990415、 山陰中央新報990415、0425)。
O-641	スナドリ	B	1	三重	度会郡二見町神前 (コウヤキ)海岸(伊 勢湾)	990416	漂着	死亡	1.40	腐敗。	福永純子	志摩半島野 生動物研究 会			
O-643	カマノカ	B	1	新潟	刈羽郡西山町火崎	990417	漂着	死亡		尾鱗切欠 損。欠損部主 で体長177c m。	英輪一博 /中村幸 弘	利尻町立博 物館/上越 市立水族博 物館	国立科学博山田 格博士経由	骨格、病理、汚染 (日経研)	早朝発見。国立科学博に輸送して4/18割 後。
O-650	カマノカ	B	1	新潟	上越市西ヶ窪	990423	漂着	死亡	2.24	体重100kg。 やや腐敗。	中村幸弘	上越市立水 族博物館	国立科学博山田 格博士経由	骨格、病理、汚染 物質、DNA分析標 本(国立科学博M32 452)、脂皮(日経 研)	4/26国立科学博で割後。
O-644	スナドリ	B	1	三重	鈴鹿市葦ヶ浦海水 浴場(伊勢湾)	990425	漂着	死亡	1.73	外脚損傷欠 し。腐敗。	吉岡基	三重大学生 物質科学部		脂皮(三重大)	990427現地調査。埋却。他報告者;古田 正英(鳥羽水族館)。

No.	種名	群数	雌雄	産地	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-648	スズリ	B	1	1		下関市豊浦村岩群 地先	990427	漂着	死亡	0.75	体重4.57kg。 腐敗黒色化。 詳細計測値有 り。	菊池拓二	下関市立下 関水族館		全身冷凍、DNA標 本(下関水族館)	
P-043	ト	A	1	1	北海道	小樽市朝里海岸 (石折湾)	990429	漂着	死亡	腐敗。		木村方一	北海道教育 大学札幌校	第一発見者; 山田清二		
P-044	ト	A	1	1	北海道	小樽市忍路	990429	漂着	死亡	体長約2.5m。 腐敗。		木村方一	北海道教育 大学札幌校			
0-659	スズリ	B	1	1	宮崎	宮崎市崎雲港南 500m	990429	漂着	死亡	2.39	腐敗。黒色 化。詳細計測 /基準保 存有り。	栗田勇男 /基準保 存	宮崎県水産 試験場		無し	
M-162	シツシツ	A	1	1	北海道	標津郡標津町伊奈 仁(根室海峡)	990504	漂着	死亡	獲定体長5.5 m。		佐藤晴子			無し	夕刻発見。波打ち際を漂っていた。時化 のため翌日流失。
0-651	シツシツ	A	1	1	北海道	厚岸郡厚岸町中町意敷 布(ワカサガ)砂 浜	990507	漂着	生存→ 死亡	3.28	9日11:15AM死 亡を確認。	佐藤晴子			国立科学博物館 類、脂皮(日経 研)	昼頃発見。漁業者らがクレーンで2回沖に出 したが再漂着。5/8夕刻にはまだ生存し ていたが9日死亡を確認。日経研職員参加。他報 告者;山田裕(国立科博)、木村方一(北 海道教育大)、K&M、新聞記事(北海 道990509)。
0-661	スズリ	B	1	1	千葉	銚子市長崎町	990510	漂着	死亡	腐敗。		宮内幸雄	銚子海洋研 究所	第一発見者; 田村哲也	無し	果崎子水産事務所、市役所により埋却。
0-664	オキコントウ	A	1	1	沖縄	平良市行徳間原法 海岸(宮古島)	990510	迷入	生存		体長約3m。口 腔内にピコル あり。	松岡正道	出光興産	新聞情報(報 球新報99051 5)	無し	平良市総務課漁業センター(中間育成場)に送 入。他報告者;山田裕(国立科博)。新聞 記事(沖縄タイムズ990514)。
EX-047	シロイロカ	A	1	1	北海道	利尻郡利尻富士町 紫泊港沖1km(利尻 島)	990512	目視情報	生存		未成熟と思わ れる。	佐藤雅彦	利尻町立博 物館	新聞情報(日 刊宗谷99052 2)	無し	14:00頃、稚内水産の調査船で無人水中 VRのテスト中に撮影された。他報告者;吉 岡基(三重大)、R&K、ユース、遠藤990520。
0-660	ハコントウ	A	1	1	沖縄	八重山郡竹富町東 棧橋南約1km(竹富 島)	990514	漂着	死亡	2.76	腐敗。詳細計 測値一部有 り。	島達也	石垣市十 海津専門学 校		下顎歯(報告者)	
0-662	スズリ	B	1	1	愛知	海美郡海美町古田 折立(三河湾)	990515	漂着	死亡	0.82	腐敗顕著。	大池辰也 /柳嶋昌 幸	南多比一 ツナト	第一発見者; 杉浦隆夫	骨格(ヒナフシ ト)、脂皮、肝腎 (愛媛大)、脂皮 (三重大)、胃内 寄生虫(国立科 博)。	12:00発見。埋却。

No.	種名	群	数	艘	県名	位置	年月日	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	積木	備考
0-663	サメ	A	1	1	富山	高岡市太田松太枝浜(富山湾)	990518	漂着	死亡		腐敗。	橋本清治	富山県高岡土木事務所	第一報告者; 富山県庁水産漁港課	無し	体表に手印と思われる傷があり、屍骸が投棄された可能性あり。高岡市港場で焼却。
0-665	サメ	B	1	1	愛知	知多郡南知多町大字榑島字蛸浜(三河湾)	990518	漂着	死亡	1.27	腐敗顕著、腸露出。	大池辰也	南知多大学	第一発見者; 若山正芳	脂皮・筋(袋線大)、脂皮(三重大)	埋却。
0-663	サメ	B	1	1	三重	鈴鹿市白子町江島海岸(伊勢湾)	990519	漂着	死亡	0.80	腐敗顕著、腸管露出。	古田正英	鳥羽水族館		脂皮(鳥羽水族館)	5/20現地調査、埋却。
0-669	サメ	A	1	1	香川	高松市墨島西町815-1(塩釜神社前)	990519	漂着	死亡	2.50	腐敗。	吉松定昭	香川県水産試験場		無し	5/20焼却処分。新聞記事(同日990520)。
0-666	サメ	B	1	1	愛知	幡豆郡吉良町大学宮崎字宮前105(恵比寿海水浴場(三河湾))	990520	漂着	死亡	0.73	腐敗初期。詳細計測値あり。	大池辰也/木下愛子	南知多大学	第一発見者; 三浦義博	脂皮筋肝腎(袋線大)、脂皮(三重大)	埋却。
0-667	サメ	B	1	1	山口	下関市武久町2武久海水浴場	990520	漂着	死亡	0.78	詳細計測値あり。	新池匠二	下関市立下関水族館		脂皮(日経研)、全身冷凍(下関水族館)	
0-668	サメ	B	1	1	愛知	西尾市港町矢作川河口沖合30m(三河湾)	990522	漂流	死亡	1.75	詳細計測値あり。膀胱付近に拳大の腫瘍あり。	大池辰也/駒島幸	南知多大学	第一発見者; 林克也	脂皮筋肝腎(袋線大)、脂皮(三重大)、頭部・胃内容・卵巣・子宮・精理標本(ビニラット)	15:00発見。埋却。
0-664	サメ	B	1	1	三重	津市豊崎海岸(伊勢湾)	990524	漂着	生存一頭(一頭死亡)	1.62	鳥羽水族館で保護。	吉岡基	三重大学生物質源学部			午前に地元漁師が発見。海に戻すが再漂着し、三重大学生らから応急処置の後、鳥羽水族館が保護したが5/28死亡。同日調査後に埋却。
0-655	サメ	B	1	1	三重	鈴鹿市白子町江島海岸(伊勢湾)	990525	漂着	死亡	1.39	外傷なし、腐敗。	吉岡基	三重大学生物質源学部		脂皮、皮下脂肪(三重大)	同日調査後に埋却。
0-666	サメ	B	1	1	三重	安芸郡河野町中別(伊勢湾)	990527	漂着	死亡	0.82	外傷なし、腐敗。	吉岡基	三重大学生物質源学部		脂皮(三重大)	同日調査後に埋却。
0-667	サメ	B	1	1	三重	鈴鹿市長太尾丁目海岸(伊勢湾)	990531	漂着	死亡	1.40	外傷なし、胃内に漁具断片有り。	吉岡基	三重大学生物質源学部		脂皮、筋肝腎(三重大)、頭骨(三重県庁)	同日調査後に埋却。
0-668	サメ	B	1	1	三重	鳥羽市国崎町老ノ浜(伊勢湾)	990531	漂着	死亡	1.26	腐敗、食育有り。	古田正英	鳥羽水族館	第一発見者; 若林都夫	脂皮、下顎歯(鳥羽水族館)	6/1調査後に埋却。